

「若い」は工夫で補える 〈企業編〉横引シャッター(2) (1/2ページ)

★〈企業編〉横引シャッター(2)

2016.02.10

連載: オレンジ世代の「生きがい」探し

ツイート

おすすめ 0

G+ 0



真っ赤な愛車に乗る吉田さん【拡大】

東京都足立区の横引シャッター(中央グループ)で活躍中の吉田信一さん(67)は、先代社長の時に入社して以来勤続13年。現場の施工から、現在は八潮工場でシャッターを製作している。現場ごとに1つとして同じ物がないというシャッター製作を続ける、吉田さんの「働く」とは一。

■ 老いを自覚して、対策を立てる

1948年、北海道・松前で生まれる。松前高校卒業後、上京し、国鉄(現・JR)の東京電気工事局の営業や、湯沸かし器の修理などを経験後、55歳で中央グループへ入社。動機は、「通勤時間が短いため」。車好きなので、たった5分の乗車だが、真っ赤な車で通勤している。帰郷する時は、車を転がして北海道まで運転して行く。

働き方は50代と特に変わらないが、最近は物覚えが悪くなったと感じている。作業手袋を脱いでその辺りに置くと、どこにあったか探すことに。

自分の衰えを自覚して、対策を立てて働いている。安全管理では、冬のストープは作業するそばに置かない。工具のコードは上から吊るす、など。また、不確かなところは、すぐに確認することになっている。目で見て、計測して確認し、作業を進める。うろ覚えのまま作業することは間違いの元だ。確認作業を増やして、衰えたところを補う。失敗が多い人は、自分が“年をとった”という自覚が足りないと思っている。

シャッター製作の面白さは、毎回現場が違うので、それぞれの現場によって難しさや制約条件の違いがあることだ。現役で現場へ行っている工事部長は67歳だが、どうやって納入するかを毎回工夫しているという。

「老い」は工夫で補える 〈企業編〉横引シャッター(2) (2/2ページ)

一生働く 2016.02.10

連載: オレンジ世代の「生きがい」探し

ツイート

おすすめ 0

G+

0



真っ赤な愛車に乗る吉田さん【拡大】

体力的には、肺気腫があり、1時間立っての作業は厳しい。休み休み、確認作業を入れながら製作している。今でも毎日「満足行く仕事をしたい」と「サボりたい」という気持ちとの戦いだ。病気もあるし、引退しようかと思った時期もあった。そんなとき、社長から「病院は仕事の区切りがついた時に行ったらいい」と言ってもらった。それなら、“一生働く！”でいきたいと思う。

■再就職は、好奇心と向上心で

今一番楽しいのは、孫2人と遊ぶことだ。釣りも趣味で、家族には河原でバーベキューをしてもらい、その間に魚釣りを楽しむこともある。

そんな吉田さんの愛読書は『匠の時代』(内橋克人著)。夕刊フジ連載中は、楽しみに購読していた。今では単行本が本棚に並び、時々読み返しているそうだ。

中高年の転職へのアドバイスは、「仕事に興味を持って働くことが大切」。仕事を続けていると、好奇心と向上心が日々刺激されて新鮮だ。

吉田さんは「何のための作業か、どうすれば次の工程の“施工現場”で楽に取り付けられるのかを考えると面白いと思います。部品もどの部分で機能するのか興味を持って作業しますと、注意すべき肝がわかり、楽しいですよ」と話してくれた。(「オレンジ世代」取材班)